【加賀市のお話～その１～】
加賀橋立町に伝わる悲しいおはなし

『お夏ガン洞』

その昔、病気の母を抱えて、海女で生計を支えていたお夏という娘がいました。 ある日、お夏はさざえを九十九まで採ったので、区切りのよい百にするために何度となく潜りましたが、どうしても、あと一つが採れません。

陽も傾き焦ったお夏は、「絶対に入ってはいけないよ」と言われていた巌洞の中に潜っていきます。 そしてそれきり、お夏は浮かび上がってくることはなく、いつしか人々は、この巌洞を「お夏のガン洞」と呼ぶようになりました。

【加賀市のお話～その２～】

山中温泉〈道明が淵の龍伝説〉

『ある長雨がおさまった日、一人の娘さんが、音を立て渦をまく濁流を見ていると、巨大な龍が爪を逆立てながら現れ、娘さんを飲み込もうとしました。そこに、一人の若者が立ちはだかり、龍の背中にまたがって、黄金の太刀で、一瞬にして急所をつき、龍をおとなしくしてくれました。命を救われた娘さんは、若者に「名前をお教えください」と尋ねました。でも若者は「道明」とだけ名乗り、姿を消してしまいました。

娘さんは若者にどうかもう一度会いたいと毎日医王寺に行って、薬師如来に念じました。すると道明の姿がかすかに現れました。娘が「あなたはどなた様ですか？」と聞くと、「わたしは龍頭観音。龍とともに天に昇ります。わたしに会いたければ、薬師如来を拝みなさい」と告げて姿を消しました。道明は龍頭観音だったのです。村人たちはいつしかこの淵を「道明が淵」とよぶようになりました。』

【加賀市のお話～その３～】

山代温泉『太鼓の胴』のお話

山代温泉では、湯女（ゆな）のことを、「太鼓の胴（タイコンド）」とよびます。

そして、湯の曲輪のすぐ近くにある専光寺というお寺に湯女にまつわるとても悲しい

お話しが伝わっていますので、ご紹介します。

江戸時代の中頃、山代温泉の専光寺に幸蔵というイケメンの堂守がいました。毎日暮れ四ツ（午後十時）と明け六ツ（午前四時）に時を告げるために、堂の太鼓を打つ仕事をしていました。そして当時の湯女の自由時間は暮れ四ツ（夜十時）から明け六ツ（翌朝の四時）までと決められていました。

この堂守の幸蔵は「お光」という純情で可憐な湯女と恋に落ち、二人は暮れ四ツの太鼓のあと、人目を忍んで、専光寺の四畳半の狭い太鼓の堂をデートの場所として落ち逢うようになりました。若い二人にとって、そのひとときはとても幸せな時間だったと思います。

ところが、お光が毎日の厳しい仕事と風邪がもとで床に伏すことになり、幸蔵のもとへ行けなくなってしまいました。でも誰かに頼んでそのことを幸蔵に知らせるわけにもいきません。そうとも知らず幸蔵は毎晩暮れ四ツの太鼓を打ち、お光が来るのを待ちつづけました。しかし、お光は来てくれません。そして幸蔵はお光と逢えない苦しさから、とうとう半狂乱となりました。

幸蔵はその日暮れ六ツ（午後六時）から、「お光！」「お光！」と名前を叫びながら、止むことなく太鼓を打ち続けました。そのころ、お光は幸蔵の狂わしいまでに打ち響く太鼓の音を聞きながら、はかなくも散っていったのです。お光の死を知らされた幸蔵は、この世に生きる希望を失い、専光寺境内の古池にわが身を投げてお光の後を追いました。

この悲しいお話しは、山代温泉の人びとに語り継がれ、いつしか山代では湯女のことを「太鼓の堂」転じて「太鼓の胴（タイコンド）」と呼ぶようになったそうです。

←専光寺前の案内板

←専光寺

【加賀市のお話～その４～】

「片山津の伝説・竜神と娘」

柴山潟が今よりもずっと大きく、片山津の村がとても貧しかった時代のお話しです。いつしか柴山潟にはとてもおそろしいおろちが棲むようになっていました。夜中になると村人を襲ったり、近くの家を荒らすのもしばしばでした。

←柴山潟

困り果てた村人たちは「なんとか村をお守りください!」とお薬師さまにお参りをかさねたのです。そんなある日、一人の大変美しい娘が柴山潟のほとりに倒れているのが見つかりました。村人たちはこの美しい娘を一生懸命に看病しましたが、不思議なことに、その娘の姿が夜になると見あたりません。娘はいつのまにか柴山潟のほとりに来ていたのです。「あぶないっ。あんなところにいたら、おろちに食べられてしまう!」村人たちがそう思った瞬間です。突然おろちが大きな口を開き、湖面から姿を現しました。しかし娘は逃げることなく、手に持つ琵琶をかき鳴らし始めました。その音色はそれはそれはうっとりするもので、あの恐ろしいおろちの顔つきまでやさしくなったそうです。そのときです。娘が大きな声でおろちにむかって叫びました。「おまえは今、生まれ変わった。おまえは今日から竜神となって、片山津の村人を守れ!」そう言うと娘は天へ、おろちは水中へと消え、二度と姿を現しませんでした。

その後、片山津には温泉が発見され、片山津は北陸屈指の温泉街へと発展しました。柴山潟にある浮御堂と竜神像は、片山津の人々の娘への感謝の印として建てられました。

【加賀市のお話～その５～】

動橋・小右衛門の老婆（おばば）とちまき伝説

1475 年５月４日のちまき節句の日、蓮如上人が小松の波佐谷松岡寺から吉崎御坊へ帰られる途中、動橋で日が暮れてしまいました。そこで蓮如上人は桝屋小右衛門の家に「一晩泊めて下さ

い」と願い出ましたが、小右衛門の母は「汚い坊主、さっさと立ち去れ」と追い払いました。蓮如上人が、母がちまきを作っているのを見て、「せめてちまきをもらえませんか」と頼んだところ、小右衛門の母は笹で包んだ石を投げつけ、「これを食えたら泊めてやるぞ～」とケラケラ笑ったそうです。

これを見た蓮如上人は小右衛門の母のあまりに邪見な心をあわれみ、その心を正すために、ゆでた笹を地にさし、みるみるうちに根が付き青葉が生じる様子を見せました。すると蓮如上人の不思議な力に驚き、小右衛門の母は自分の非行をわびました。そして、これまでの「自分さえ良ければいいんだ」という心を改め、その夜から息子の小右衛門ともども蓮如上人の弟子となり、教えを守りました。小右衛門は「篠の道場」の初代となって、念仏の教えを広めました。

【加賀市のお話～その６～】

大聖寺の怪談

越前屋善三郎の妻が幽霊となって後妻をとり殺した話

大聖寺中町の越前屋善三郎という町人の建てた貸家に商人夫婦が住んでいました。夫が旅商に行き、妻一人が家にいたある日の夕暮れ、表の戸をほとほとと叩く者がいます。「誰だろう」と妻が聞いてみると、女の声がして「ちょっと出てきて下さい」と言います。そしてその声に聞き覚えがあって、三年前に死んだ大家さんの妻の声に間違いありません。妻は狐狸の仕業だろうと、怖くてけっして外に出ませんでした。すると女は夫の名を呼んで、「会いたいので、出てきておくれ！」と言います。妻は夫が不在であると告げると、「明日の晩また来るので、必ず居るように伝えなさい。さもなくば、恨みますよ！」と念を押し、消えていきました。

しばらくして夫が家に帰りました。すると、妻は真っ青になって倒れています。夫が介抱し、薬を飲ませると、やっと正気を取り戻し、先ほどあったことを夫に話しました。そこで、夫の商人は、翌日の仕事を休み家にいることにしたのです。

次の日の夕方、お寺の鐘がボ～ンとなる頃、案に違わず表の戸を叩く音がします。「さぁ来たぞ」と妻は布団をかぶって打ち伏しました。夫が戸を開いて出てみると、妻が言ったとおり、そこには三年前に死んだ大家さんの妻が立っています。商人は驚きながら、「どうして迷い出て来たのか？」と問いかけると、その幽霊は答えました。「迷う事情があって往生できません。大家の家の表の戸に祈祷の札が貼ってあります。これを取り外して下さい。言うことを聞かないと、承知しませんよ!」とそれはそれは恐ろしい形相で話します。商人は自分の命を取られてはたまらないと思い、「わかった」と返事をしてしまいます。さて、商人は家に入り、おびえる妻に事の次第を話しますが、妻は「とにかくお札を取って欲しい！」と叫びます。

そこで、商人は仕方なく大家の門口に行って、そのお札を剥がしたのでした。しばらくすると、大家の家が大騒ぎになりました。「水だ、薬だ。」と言う声が聞こえ始めたので、商人が大家の家に飛び込み、「何事が起こったのか」と聞くと、たった今大家の妻が何もなかったのに、息をしていないと言います。そして医者を呼んで容体を診てもらったところ、もうすでに死んでしまったというのです。

何でも、この大家の先妻が３年前に病死するとき、幼い子どもが残されることを心配して、夫に遺言したことがありました。それは、「わたしが死んでも、幼いこの子が成人するまでは後妻を決してもらわないで下さい。この子に継母が出来たら、きっとこの子は苦労するはずです。」という言葉でした。しかし、この大家は遺言を守らず、三年経って後妻を迎えていたのでした。

商人があのお札を剥がしたので、恐ろしいことが起きてしまいました。先妻の幽霊が後妻をとり殺してしまったのです。商人は、このことが知れたら、自分も人殺しに荷担したことが分かってしまうと、このことを誰にも話さなかったそうです。後年になって、商人はこの話を友人の竹屋七左右衛門に初めて明かしたと言います。